

2000 年度 ICG 年会参加報告

日本電気硝子株式会社研究開発部

高木 雅隆

Report on ICG Annual Meeting 2000

Masataka Takagi

Nippon Electric Glass Co., Ltd., Research and Development Division

2000年5月15日から17日まで、オランダのアムステルダムで、「Challenges and Break-through Technologies」という副題のもと、2000年度のICG年会が開催された。

会議は5月のヨーロッパとは思えない、思いがけず気温の高い(25°Cを越える)中でスタートした。15日に開かれたオープニングセレモニーは、TNOで仕事をされているMr. Aad Jordaansのピアノ演奏を合間に挟みながら進められた。「The Dutch Glass Award」が、ガラス製造における泡の生成に関する研究を行ってこられたDr. Paul R. Laimboeckに授与された。引き続き「The Gottardi Prize」が、Arfred大学のDr. Alexis G. Clareに授与された。受賞講演は「Some Curious Characterization of Glass」というタイトルで行われ、特徴ある早口で研究成果を述べられた。また、セレモニーの最後に、これまでのICGの歴史をまとめた本「ICG2000 History and Vision」が発行されたことが報告された。

会議の登録者は300人弱であった。会議の構成は以下の通りであった。カッコ内は口頭及びポスターを含めた発表の数である。発表の内

容についてはさらにCD-ROMの形でプロシーディングスが配られた。

Scientific sessions

- S1. Glass structure (13)
- S2. Thermodynamics, diffusion in glass and glass melts & radiation kinetics (10)
- S3. Nucleation and crystallization (9)
- S4. Characterization & analysis of glasses & refractories (12)
- S5. Optical glasses and new applications (14)
- PK Porai-Koshits Session (6)

Technical sessions

- T1. Modeling and control in glass production (12)
- T2. Environment & Recycling (9)
- T3. Melting technology & raw materials (16)
- T4. Aging and post-treatment of glass (11)

環境とリサイクルのセッションにおいて、窯を想定したラボ実験で、雰囲気を変えた条件下でガラスからの揮発物を調べたとの報告が、TNOのLimpt氏より行われた。ソーダ石灰ガラス、アルカリホウ酸ガラス、カラーTVガラス等種々の材質について揮発物の特徴を調べた興味深い発表であった。

〒520-8639 大津市晴嵐2-7-1

TEL 077-537-8773

FAX 077-531-2031

E-mail: mtakagi@neg.co.jp

分析のセッションにおいては、ビンガラスのリサイクルを前提にして、溶融工程を制御するために必要な測定方法についての発表があった。追って開かれたワークショップでは省エネルギーがテーマであった。エネルギーを節約するために、リサイクル率の向上、バッチ&カレットの予備加熱、溶融炉の構造等についての国毎の成果や研究結果が紹介されていた。また、ワークショップの一環として、カレットのリサイクル工場・そのリサイクルカレットを使う専門のビンガラス溶融・生産工場の見学会も開かれた。こうした発表や見学が特に印象に残

り、今回の会議参加を通して、省エネルギー・リサイクルそして環境という言葉が改めて重く感じた。また、国土の25%が海面下の高さにあるというオランダに今いること考えたときその思いはさらに深まった。

初夏の暑さの中、会議に付随する形で行われたキューケンホッフ王立植物園へのツアーでは、すでに盛りは過ぎたものの青や黒も含め様々なチューリップが咲き誇っていた。園の中で歌われていた「アムステルダムの子チューリップ（正しいタイトルかどうかはわからない）」には春を喜ぶオランダの風が感じられた。